

節の結合と縮約 — 英語関係節の発達から —

縄田 裕幸*

Hiroyuki NAWATA

Connection and Reduction of Clauses: The Development of English Relative Clauses

ABSTRACT

This paper investigates how the relative pronouns *sē/sēo/þæt* in Old English were replaced by the modern *wh*-relative pronouns *which/who(m)* in both functional and structural viewpoints. I first reconsider the “free-relative-origin hypothesis” for headed *wh*-relatives advanced by Fuß (2021) and others. This hypothesis is indeed successful for the development of German relative pronoun *was*, but cannot be straightforwardly applied to English *wh*-relatives. I will instead argue that headed *wh*-relatives are descendants of independent *wh*-interrogatives. This is supported by the fact that early headed *wh*-relatives were limited to non-restrictive uses. I will also give an account for why *which*, but not *what*, was adopted as the relative pronoun for [-person] antecedents and why *which* developed earlier than *who(m)* as a relative pronoun. Then, I compare clause-sizes of non-restrictive *wh*-relatives, restrictive *wh*-relatives and zero-relatives and structure-building operations that introduce them into the phrase structure. I will demonstrate that the development of these headed-relatives can be described as a process in which the size of clauses get gradually reduced and the relative clauses get more and more connected into the antecedent.

【キーワード：非制限関係節，制限関係節，ゼロ関係節，FORMSEQUENCE，Pair-/Set-Merge】

1. 序

古英語は、現代英語とは大きく異なる関係詞の体系をもっていた。屈折を示す関係代名詞としては指示詞 *sē/sēo/þæt* が用いられ、先行詞の性・数と関係節内の格に応じて変化した。(1a)では男性単数名詞 *bisceop* ‘bishop’に合わせて *þone* が、(1b)では中性単数名詞 *hús* ‘house’に合わせて *þæt* が、それぞれ対格の関係代名詞として現れている。¹

- (1) 古英語の関係代名詞
- a. *se* ***bisceop þone/þe***
 the.M.SG.NOM *bishop that.M.SG.ACC/þE*
 ic *métede*
 I *met*
- b. *þæt* ***hús þæt/þe***
 the.NUET.SG.NOM *house that.NUET.SG.ACC/þE*
 hie *byldon*
 they *built*

また、屈折しない不変化詞型の関係詞としては *þe* があり、先行詞の性・数や関係節内の格にかかわらず用いられた。

他方で現代英語では、よく知られているように先行詞が [+person] であれば *who(m)* が用いられ、 [-person] であれば *which* が現れる。

- (2) a. *the bishop who(m)/that I met*
 b. *the house which/that they built*

また、先行詞の種類にかかわらず用いられる関係詞として *that* がある。

このように、古英語と現代英語にはともに形を変える関係詞と変えない関係詞がある。そして現代英語の *that* は古英語の中性単数指示詞 *þæt* に由来する。ここから古英語の指示詞 *sē/sēo/þæt* の屈折が衰退して *that* になったことで、形を変える関係詞として新たに *who(m)/which* が登場したという見立てができればよい。しかし Allen (1980) が (3) で指摘しているとおりに、関係詞の体系が変化した原因とメカニズムはそれほど単純でない。

- (3) “While it seems plausible that the loss of inflection in the determiner system should have played a role in the importation of the more highly inflected interrogative pronouns into the relative clause system, **this was probably not the only or even the most important factor.**”

(Allen (1980: 201); 強調は本稿著者)

後にデータとして示すように、指示詞 *sē/sēo/þæt* の屈折の衰退と関係代名詞 *who(m)/which* の発達の間には、無視できない時間差が存在している。

本稿の目的は大きく 2 つある。1 つは関係詞の機能に着目することで、指示詞を用いた関係代名詞体系 (D システム) から疑問詞を用いた体系 (*wh* システム) への移行が生じた原因とメカニズムを明らかにすることである。

* 島根大学学術研究院教育学系

もう1つはwh関係節の発達過程を近年の極小主義の枠組みで分析し、節構造の通時的変化がたどる方向性についてひとつの像を提示することである。

以下、2節では先行詞付wh関係節の起源に関する先行分析—自由関係節由来説—を批判的に検討し、これを英語史に適用する際に生じる問題点を指摘する。つぎに3節では、英語のwh関係節の発達について本稿の仮説を提示する。wh関係詞はまず談話指示機能をもつ疑問詞whichが転用される形で発達し、その後who(m)へと拡大した。ここから、wh関係節はwhich疑問文と自由関係節を起源とする多重起源構文 (cf. Van de Velde, Smet and Chesquière (2015)) の一種であると論じる。さらに4節と5節では、関係節の発達を句構造構築の観点から分析し、英語の関係節の一連の変化は、節のサイズが縮小しつつ被修飾要素に組み込まれていく過程として捉えることができるかと主張する。6節は結語である。

2. 先行詞付wh関係節の起源は何か

関係詞のDシステムからwhシステムへの変化は、英語のみならずゲルマン系言語で広く観察される現象である。先行詞付wh関係節はどこから来たのか。この問いに対してFuß (2021), Gisborne and Truswell (2017)などで提案されているのが(4)の「自由関係節由来説」である。

- (4) 自由関係節由来説
wh-interrogatives/-indefinites (in various constructions) →generalizing/free choice/unconditional **free relatives** →individuating/specific **free relatives** → **headed relatives** (subject to language-specific restrictions)
 (Fuß (2021: 8); 強調は本稿著者)

これは、もともと疑問詞として用いられているwh語(たとえばwhat「何」)が不定の自由関係詞(whatever「…するものは何でも」)、定の自由関係詞(what「…するもの」)を経て先行詞付wh関係詞へと発達することを述べている。

この仮説によれば、(4)に示した一連の変化は構造的あいまい性をもつ文によって引き起こされる。たとえば、(5)の古高ドイツ語(Old High German)のuuaz 'what' 節は間接疑問節(彼らは何をするのか)とも自由関係節(彼らがすること)とも解釈できる。

- (5) Old High German
 uuanda si ne-uuizzen [uuaz sî tuônt]
 since they not-know what they do
 ⇒ ... [_{free CPrel} uuaz sî tuônt]
 a. 'Since they don't know what they do.'
 b. 'Since they don't know the thing they do.'
 (Notker, Psalmen, Glossen 18 56-59/Fuß (2021: 9))

自由関係詞となることで[+Q]素性を失ったuuaz 'what' は(6)のように先行詞付wh関係詞としても用いられるようになった。

- (6) Old High German
 dhazs sie ni eigun couuihd [huuazs
 that they not own anything what.REL
 sie dhar uuidar setzan].
 they there against set
 'That they do not possess anything that they set
 against it.'
 (lt. dum non habeant quod proponant, Isidor, V.5/
 Fuß (2021: 11))

現代ドイツ語は、基本的には古英語と同様に指示詞が関係詞を兼ねるDシステムを採用しているが、先行詞が不定代名詞や指示代名詞の場合にはwas 'what' が関係詞として用いられる。(6)は、その兆候がすでに古高ドイツ語で見られることを示している。

このように、自由関係節由来説はドイツ語のwas関係節の発達をきわめて適切に説明することができる。しかし、この説を英語の先行詞付wh関係詞へと適用するといくつかの問題が生じる。それらは、(7)に示した3点に要約される。

- (7) 英語史での問題点
 a. [-person]を先行詞とする関係代名詞としてwhatではなくwhichが用いられるのはなぜか。
 b. which, who(m)が非制限節から制限節へと発達したのはなぜか。
 c. wh関係代名詞としてwho(m)よりもwhichが先に発達したのはなぜか。

これらを順にみていくと、まずドイツ語では[-person]の不定代名詞を先行詞とする関係代名詞としてwas 'what' が用いられるのに対して、英語ではwhatではなくwhichが[-person]の関係代名詞となっている(=7a))。表1からわかるように、疑問詞としてのwhichは文脈から想定される限定的な集合を前提として、その中から1つを選ぶ機能(以下、この機能を[+D-link]と表記する)をはたしている。またWhich is your favorite singer?のような疑問文ができることから、疑問詞としてのwhichは[-person]だけではなく[+person]としても用いられることがわかる。さらに、古高ドイツ語のuuazと異なり古英語のhwilcは単独で自由関係詞として用いられず、不定の自由関係詞swa hwilc swa 'whichever'としての用法しかなかった。したがって、(5)にみられるような間接疑問節と自由関係節の構造的あいまい性が生じる余地はなかったはずである。なぜ英語でwhatではなくwhichが[-person]の先行詞付wh関係詞として用いられるようになったのか、自由関係節由来説では説明することができない。

また、英語のwh関係節ははじめに非制限用法から発達して、次第に制限用法へと広がっていったことが知られている(=7b); 宇賀治 (2000)参照)。表2は、中英語のタグ付きコーパスPenn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, second edition (PPCME2)からいくつかのテキスト

トを抽出し、which関係節の制限用法と非制限用法の生起数と割合を調査した結果のまとめである。関係節の制限用法と非制限用法の区別はしばしば困難であるが、今回の調査では先行詞が固有名詞である用例と先行詞と関係詞がコンマで区切られている用例を非制限用法に分類した。表からわかるように、いずれのテキストでも非制

限用法が7割から8割程度の高頻度で用いられている。自由関係節由来説のもとでは、先行詞を内包した自由関係節がときに明示的な先行詞をもたない非制限関係節へと発達し、最後に先行詞を限定する関係節へと拡大したことになる。このような発達の経路は、言語変化の一方性の観点からはやや不自然であるといわざるを得ない。

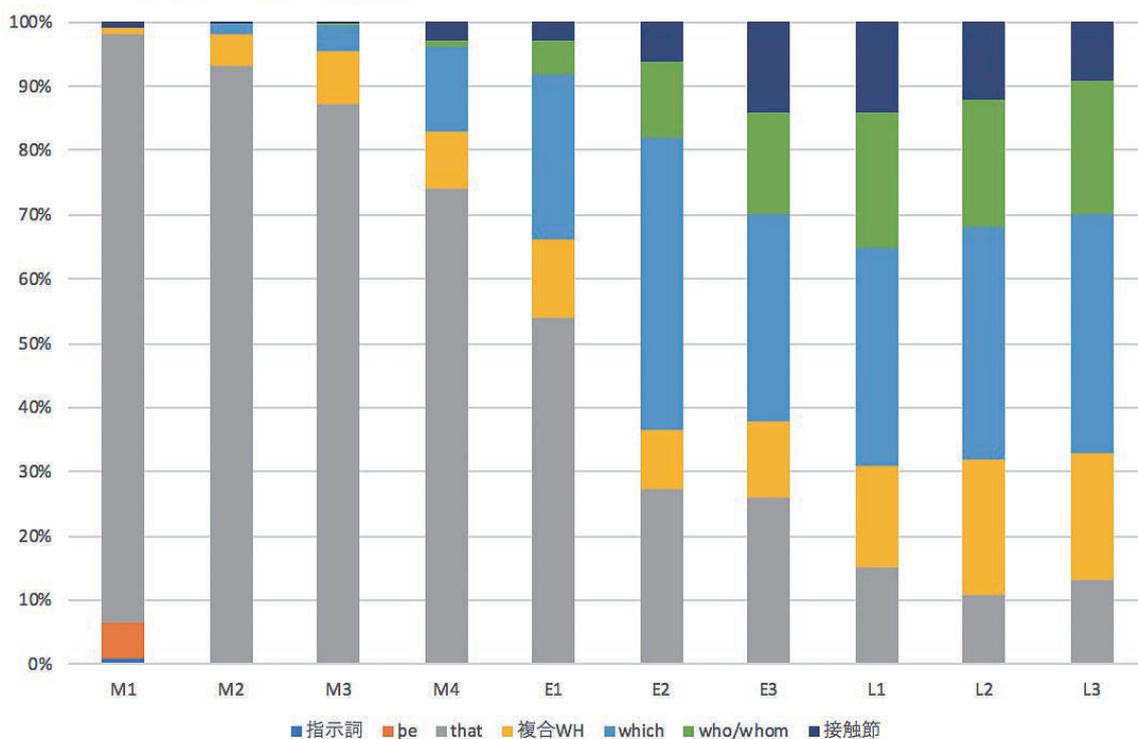
表1 疑問詞と関係代名詞の対応

| | | 古英語 | 現代英語 |
|---------|-----------|------------------|--------------|
| 疑問詞 | [-person] | hwæt | what |
| | [+person] | hwa | who |
| | [+D-link] | hwilc | which |
| 自由関係詞 | [-person] | (swa) hwæt (swa) | what(ever) |
| | [+person] | (swa) hwa (swa) | who(ever) |
| | [+D-link] | swa hwilc swa | whichever |
| 先行詞付関係詞 | [-person] | | which |
| | [+person] | | who |

表2 中英語における which 関係節の制限用法と非制限用法 (PPCME2)

| | 制限用法 | | 非制限用法 | |
|--|------|-----|-------|-----|
| | 生起数 | 割合 | 生起数 | 割合 |
| <i>Earliest Prose Psalter</i> (c1350) | 11 | 19% | 46 | 81% |
| <i>The Parson's Tale</i> (c1390) | 29 | 33% | 59 | 67% |
| <i>The Cloud of Unknowing</i> (a1425) | 12 | 22% | 43 | 78% |
| <i>Capgrave's Chronicle</i> (c1464) | 73 | 30% | 174 | 70% |
| <i>Fitzjames' Sermo die Lune</i> (?1495) | 4 | 20% | 16 | 80% |

図1 中英語・近代英語の先行詞付関係節標識の変遷 (PPCME2, PPCEME, PPCMBE)



さらに、wh関係詞の中でも *which* と *who(m)* では発達の時期が異なり、前者の方が後者よりも早く出現した(=7c)。図1は、PPCME2, Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)における先行詞付関係節を網羅的に調査し、各関係詞が占める割合の時代ごとの変遷をまとめたものである。^{2,3} 指示詞 *sē/sēo/þæt* と不変化詞 *þe* は中英語のはじめには消失し、初期中英語では *that* がほぼあらゆる先行詞に対して用いられていた。*wh*関係詞は、まず *in which* などの複合関係詞において出現した。その後、単独の *which* が後期中英語で生産的に用いられはじめ、初期近代英語では [-person] 先行詞に対する無標の関係詞となる。*who(m)* の出現は *which* よりも遅く、初期近代英語になってようやく広がりを見せた。*which* と異なり、*who* には特定の人を指す自由関係詞としての用法がある。したがって、自由関係節由来説のもとでは、*which* よりもむしろ *who* の方が先に先行詞付関係詞として発達してもおかしくはないが、事実はその逆である。

以上の論拠から、先行詞付関係節の自由関係節由来説は、ドイツ語の *was* の発達に対しては有効であるが、英語の *which/who(m)* に対しては当てはまらなると結論づけられる。

3. 多重起源構文としての *wh* 関係節

それでは、英語の先行詞付 *wh* 関係節の起源はどこに求めればよいであろうか。その手がかりとなるのが、(8) のような独立 *which* 節である。

- (8) A: "The dog's lungs were clear."
 B: "**Which** means that the dog was dead before the fire started?"
 (『ウィズダム英和辞典』 s.v. *which*)

節を先行詞とする非制限関係節は、上の例のように主節として独立することがある。このような用法は話し言葉だけでなく書き言葉でも用いられ、新聞などのややかたい文体でもみられる(中山(2008))。興味深いことに、こ

のような独立用法は *which* 関係節に特有で、*who(m)* を用いた関係節にこのような用法はない。

独立関係節は現代英語だけでなく初期英語でも観察される。(9)はPPCME2から採取した中英語の独立 *which* 節である。

- (9) 中英語の独立 *which* 節
 But and the serpent was feller than alle luyngne beestis of erthe [...]. **Which serpent** seide to the womman,
 'But and the serpent was more fierce than all living beasts of earth [...]. That serpent said to the woman,'
 (CMOTEST-M3,3,1G.134)

第2文冒頭の *which serpent* は第1文の *the serpent* を指している。通常、先行詞付関係節では単に *which* を用いるところである。ここでは *which* が指示詞 *that* と同じように振る舞っている。

下の(10)も中英語の独立 *wh* 節の例であるが、ここでは関係副詞 *wherefore* が接続副詞 *therefore* の変異形として現れている。その後には直接疑問文が続いており、この *wherefore* 節が独立文であることを示している。

- (10) 中英語の独立 *wh* 節
 For he enforssede hym trewly to lufe Ihesu. **Wherefore**, what may defaile vn-to hym þat couaytes vn-cessandy for to lufe þe name of Ihesu?
 'For he enforced him faithfully to love Jesus. Therefore, what may defail onto him that covets unseasingly to love the name of Jesus?'
 (CMROLLTR-M24,3.88)

このように、初期中英語では代名詞や副詞の *th-* 形が *wh* 形によって代用されることがあり、とくに文頭でその傾向がみられた。このような独立 *wh* 節こそが先行詞付 *wh* 関係節の起源であるというのが本稿の主張である。関連する *wh* 語の素性の変化と関係代名詞システムの変化をまとめると図2および表3のようになる。

図2 疑問詞から関係詞への素性変化

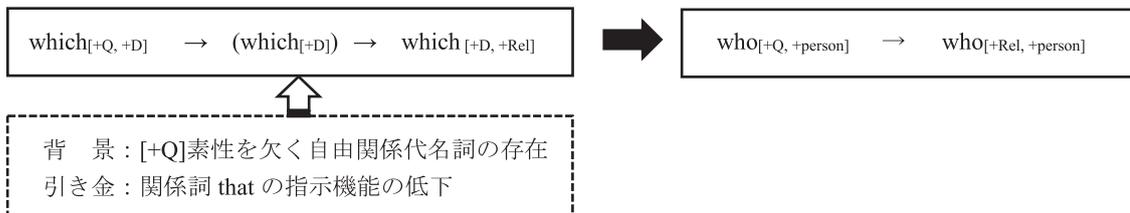


表3 英語の関係代名詞システムの変化

| | 古英語 | 初期中英語 | 後期中英語 | 後期中英語-初期近代英語以降 | |
|-----------|-------------------|-------------|--------------|----------------|---------------|
| [+D-link] | <i>sē/sēo/þæt</i> | <i>that</i> | <i>which</i> | [+person] | <i>who(m)</i> |
| [-D-link] | <i>þe</i> | <i>that</i> | <i>that</i> | [-person] | <i>which</i> |
| | | | | unspecified | <i>that</i> |

先に表3の関係代名詞システムの変化をみておきたい。本稿の冒頭で、古英語の *sē/sēo/þæt* を「屈折する関係詞」、*þe* を「不変化型関係詞」と分類した。しかし *wh* 関係詞の出現を理解するためには、前者を「談話指示機能をもつ関係詞」、後者をそのような機能をもたない関係詞とラベル付けするのが適切である。初期中英語で語形変化が消失し、*sē/sēo/þæt* が *that* に統一された後も、*that* は指示詞として備えていた [+D-link] 機能を維持したと思われる。しかし *that* が完全に補文標識化して [+D-link] 機能を失うと、新たに談話指示的な関係代名詞として *which* が疑問詞から転用された。これは、2 節で論じたように *which* がもともと疑問詞として [+D-link] 機能をもっていたからだと考えられる。

当初の *which* が [+D-link] 関係詞として用いられていたことは、以下の事実から支持される。第1に、中英語では(11)のように *which* が定冠詞 *the* をともなって現れることがあった。これは、*the* によって *which* の指示機能を強調あるいは補強する役割をはたしていたと解釈することができる(他方で *who* には *the who* のような定冠詞付の用法はなかった)。

- (11) 関係代名詞 *the which*
loue of his herte, þe whiche he hap euermore had vnto þee
 ‘love of his heart, which he has evermore had unto you’
 (CMCLOUD-M3,14.16)

第2に(12)のように中英語の *which* はしばしばものだけでなく人も先行詞としてとることができた。

- (12) 人を先行詞とする *which*
Therfor alle the men whyche Moises hadde sent to see the lond, [...] weren deed,
 ‘Therefore all the men which Moses had sent to see the land [...] were dead,’
 (CMOTEST-M3,14,20N.675)

このことは、当初の *which* がかならずしも [-person] 素性をもっていなかったことを示している。中英語の終わりから初期近代英語にかけて *who(m)* が一般化したのち、*which* が [-person] で *who(m)* が [+person] という役割分担が確立した。

このような関係代名詞 *which* と *who(m)* の素性の変化を取り上げて示したのが、前頁の図2である。繰り返しになるが、関係詞 *that* の指示機能が低下したことにより疑問詞 *which* が [+D-link] 関係詞へと転用された。指示詞的に用いられた *which* はかならずしも先行詞に組み込まれて名詞句を構成せず、独立節を導く接続詞 (*which*_[+D]) や非制限関係詞 (*which*_[+D, +Rel]) として用いられたと考えられる。その後、*which* が [-person] 関係詞として認識されるとともに *who* も [+Q, +person] から [+Rel, +person] へと素性が変化し、関係詞として用いられるようになった。このような変化の過程を想定することで、前節(7)で提起した3つの問題—(i) [-person] 関係詞として *what* ではなく

which が用いられるのはなぜか; (ii) *which, who(m)* が非制限節から制限節へと発達したのはなぜか; (iii) *wh* 関係代名詞として *who(m)* よりも *which* が先に発達したのはなぜか—に対して一定の説明を与えることができる。

以上の議論から、英語の先行詞付 *wh* 関係節の起源は *which* 疑問文であるといえる。しかしながら、これは先行詞付 *wh* 関係節の発達に自由関係節がまったく関与しなかったということを意味するものではない。図2に示したように、疑問詞 *which* が関係詞へと転用される際、すでに [-Q] 素性を欠いていた *wh* 語の自由関係詞用法(あるいは不定代名詞用法)が間接的・触媒的な役割をはたしたことは想像に難くない。このように複数の起源をもつ構文を Van de Velde, Smet and Chesquière (2015) は複数起源構文 (Multiple Source Construction) とよんでいる。

(13) Multiple Source Construction

“[I]nnovations in language change may derive not just from one, but from different source constructions at once. That is, change often seems to involve some interaction between lineages or between different branches of a lineage, i.e. involve multiple source constructions on a macro-level or on a micro-level respectively.”

(Van de Velde, Smet and Chesquière (2015: 1))

自由関係節由来説のもとでの *wh* 関係節の発達過程を示した前節の(4)では、「疑問文→自由関係節→先行詞付関係節」という単線的な変化が想定されていた。しかし本稿の提案によれば、疑問文から先行詞付関係節への転用に自由関係節が触媒的に関わるといふ、複線的な変化が生じたことになる。その意味で、英語の先行詞付 *wh* 関係節は複数起源構文の一種である。

4. 非制限関係節の構造

以上の議論をふまえて、本稿の後半では *wh* 関係節の発達過程を近年の極小主義における句構造構築の観点から分析したい。前節で明らかにしたように、英語の先行詞付 *wh* 関係節はまず非制限用法から発達した。(14) からわかるとおり、非制限関係節ではさまざまな主節現象が観察される(主節現象については Emonds (1970) を参照)。

(14) 非制限関係節にみられる主節現象

- a. He said he'd show a few slides towards the end of his talk, at which point please remember to dim the lights.
- b. She may have her parents with her, in which case where am I going to sleep?
- c. I didn't get much response from Ed, who seemed rather out of sorts, didn't he?

(Huddleston and Pullum (2002: 1061))

非制限関係節内部では命令文や直接疑問文が生じることができる(=14a, b)。また非制限関係節は付加疑問文を許す(=14c)。これらはいずれも主節に特有の現象である。

さらに、制限関係節内部では話者の心的態度を表す文体離接詞 (style adjunct) が生じ得ないのに対し (= (15a)), 非制限関係節はこれらの生起を許す (= (15b))。

- (15) 文体離接詞の認可
- a. *The boys that have **frankly** lost their case should give up.
 - b. The boys, who have **frankly** lost their case, should give up.
- (Emonds (1979: 239); 強調は本稿著者)

この事実もまた、非制限関係節が主節の特性をもっていることを示している (天野 (1999) も参照)。

資料が限られている初期英語において、(14) や (15) のような主節現象を非制限関係節に見出すのは容易ではない (ただし、wh 節内で直接疑問文が生じている前節の (10) はそのような例の 1 つである)。しかし手がかりがないわけではない。それが動詞第二位 (V2) 語順である。中英語は現代ゲルマン系言語と同様に主節で V2 語順を示した。そして関係詞が主格で用いられる場合、関係節内部の語順は関係詞に定形動詞が後続する V2 型となる。したがって、もし主格関係詞が非制限関係節において制限関係節よりも優勢であれば、非制限関係節が主節の特性をもっていたといえるであろう。

そこで、2 節の表 2 と同じテキストのデータを用いて、制限関係節と非制限関係節における主格 wh 関係詞の生起状況を調査した。その結果をまとめたのが下の表 4 である。⁴ すでに V2 語順が衰退した 15 世紀末に書かれた Fitzjames' Sermo die Lune では主格 wh 関係詞の割合は制限関係節と非制限関係節でほとんど差がないが、時代をさかのぼるにつれて制限関係節での主格 wh 関係詞の割合が低くなり、主格はもっぱら非制限関係節でのみ見られる特性となっている。

句構造標識で書き表すと、主格 wh 関係節は (16a) のように定形動詞が C 領域まで上昇していない非 V2 型の構造と、(16b) のように T-to-C 移動が生じている V2 型の構造であいまいである。

- (16) 主格 wh 関係節の構造的あいまい性
- a. $[_{CP} \text{which}_i C [_{TP} t_i V\text{-T} [_{VP} t_V \dots]]]$
(T-to-C 移動なし : 非 V2 型)
 - b. $[_{SAP} SA [_{CP} \text{which}_i V\text{-T-C} [_{TP} t_i t_T [_{VP} t_V \dots]]]]]$
(T-to-C 移動あり : V2 型)

V2 語順が生産的だった時代において、制限関係節が (16a) の構造のみを許したのに対し、非制限関係節では (16a) と (16b) の構造がともに生じ得たと仮定すれば、表 4 にまとめた主格関係詞の生起状況を正しく捉えることができる。このことから、中英語においても非制限関係節は主節としての特性をもっていたといえる。

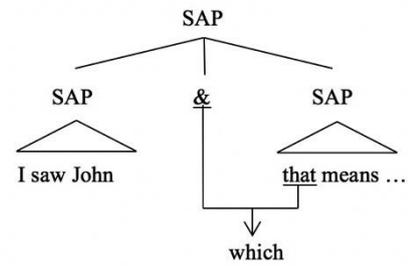
(16b) の V2 型の構造では、CP の上に SAP という階層が現れている。SA は speech act あるいは speaker-addressee の頭文字である。Ross (1970) の遂行節分析以来、最上位の主節には話者の発話行為を表す SAP が存在するという提案がしばしばなされている (Speas and Tenny (2003) など)。また Woods (2016) や Miyagawa (2022) は、主節現象を示す一部の埋め込み節にも SAP が現れると主張している。そこで本稿では、V2 語順の認可条件として (17) を仮定する。

- (17) V2 節の認可条件
V2 節は SA 主要部によって選択されなければならない。 (cf. Ross (1970), Speas and Tenny (2003), Woods (2016), Miyagawa (2022) for speech act phrases)

SAP を含む非制限関係節では、SA の選択特性を満たすために T が C まで移動して V2 語順が生じる。

以上の議論をふまえると、非制限関係節の構造を (18a, b) のように表すことができる。

- (18) a. 並列型非制限 wh 関係節



- b. 埋め込み型非制限 wh 関係節

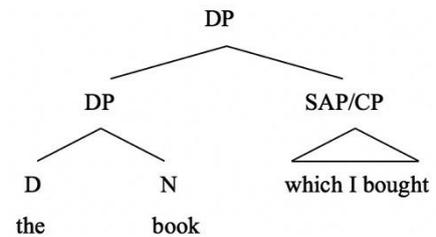


表 4 制限関係節と非制限用法における主格 wh 関係詞の生起状況 (PPCME2)

| | 制限用法 | | 非制限用法 | |
|--|-------|-----|---------|-----|
| | 主格 | 割合 | 主格 | 割合 |
| <i>Earliest Prose Psalter</i> (c1350) | 0/13 | 0% | 23/50 | 46% |
| <i>The Parson's Tale</i> (c1390) | 0/29 | 0% | 19/64 | 30% |
| <i>The Cloud of Unknowing</i> (a1425) | 1/12 | 8% | 35/43 | 81% |
| <i>Capgrave's Chronicle</i> (c1464) | 28/73 | 38% | 124/201 | 62% |
| <i>Fitzjames' Sermo die Lune</i> (?1495) | 4/8 | 50% | 13/27 | 48% |

非制限関係節には(18a)のような並列型と(18b)のような埋め込み型の2種類がある。並列型は主節に非制限関係節が後続するタイプで、前節で紹介した独立which関係節や先行する節の内容を先行詞とする非制限関係節もこれに分類される。構造的にはSAPを等位接続した形となっており、等位接続詞(&)と第二等位項の指示詞(that)が音韻部門で融合し、/which/あるいは/who(m)/として発音される。他方、埋め込み型の非制限関係節は先行詞であるDPに付加しており、関係節自体の範疇はCPまたはSAPとなっている。SAPの場合には(14)-(15)のような主節現象が認可される。

(18a, b)の構造は、それぞれ(19a, b)の統語操作によって構築される。

- (19) a. FORMSEQUENCE (FSQ)
 FSQ (X_1, \dots, X_n) \rightarrow $\langle \&, X_1, \dots, X_n \rangle$
 (cf. Chomsky (2021: 31))
- b. Pair-Merge
 Merge (α, β) \rightarrow $\langle \alpha, \beta \rangle$
 (cf. Chomsky (2004: 118))

並列型非制限wh関係節が等位構造をなしているという直感はRoss (1967)以来の古典的分析を反映したものであるが、このような並列構造を構築する操作としてChomsky (2021)は(19a)のシーケンス形成(FORMSEQUENCE: FSQ)を提案している。FSQは、 X_1, \dots, X_n という複数個の要素を文字どおり線形的に並べる操作である。(19b)の対併合(Pair-Merge)も複数の要素の順序対を形成する操作であるが、要素の数が2個に限定される点がFSQと異なる。Pair-Mergeを関係節のSAPまたはCPとその先行詞DPに適用すると、(18b)の埋め込み型非制限wh関係節構造が形成される。

5. ゼロ関係節の発達

当初非制限用法で用いられたwh関係節は次第に制限用法でも現れるようになり、さらに後期中英語では関係節標識を欠いたゼロ関係節が出現した。この節では縄田(2022)に基づいてゼロ関係節の出現過程を概観し、制限wh関係節とゼロ関係節の構造を提案する。

いくつかの先行研究において、ゼロ関係節は制限的wh関係節(=CP)よりも小さな構造をなしていると主張されている。たとえばBošković (1997), Doherty (2000), Hayashi (2022)は、ゼロ関係節はTPであると論じている。

縄田(2022)も基本的にはその立場を支持しつつ、ゼロ関係節はCPよりも小さくTPよりも大きな範疇、すなわちTopPであるとしている。その根拠になっているのが、英語にゼロ関係節が出現した時期である。表5は2節の図1からM3期からL1期までを取り出して、先行詞付関係節に占めるthat関係節とwh関係節とゼロ関係節の割合の推移を表の形でまとめたものである。M3期とM4期では先行詞付関係節の標識としてthatが圧倒的多数を占めていたが、wh関係節がその割合を増やしてE2期でthat関係節を逆転している。ゼロ関係節はM3期に少数の例が観察されるものの先行詞付関係節に占める割合は0.3%と非常に低く、文法的に生産的であるとみなされるのはM4期以降である。ゼロ関係節はwh関係節に遅れて徐々に割合を増やし、E3期には14%にまで増加した。

注目したいのは、英語にゼロ関係節が出現した時期がちょうどV2語順が衰退した時期と一致するという事実である。Fischer et al. (2000)によれば、英語においてV2語順が衰退したのは15世紀中頃と推定されており、これは表5の時代区分ではM4期に相当する。この時期にゼロ関係節が生産的に観察されるテキストの1つにThe Book of Mergery Kempeがあり、PPCME2では25例が検出される。1例を(20a)にあげる。

- (20) a. 関係節
 Blyssed Modyr, telle ge my dowtyr of þe gretnesse of loue [I haue vn-to hir].
 ‘Blessed mother, tell you my daughter of the greatness of love I have onto her.’
 (CMKEMPE-M4,50.1112)
- b. 話題化文
 Þat grace God gafe þis creatur
 ‘that grace God gave this creature’
 (CMKEMPE-M4,16.319)

そして当該テキストにおいては、目的語が話題要素として現れている話題化文において、V2型の語順に加えて(20b)のような非V2型OSV語順が観察される。

ここから、ゼロ関係節の出現は主節でのV2語順の衰退と同じ原因より引き起こされた現象だったのではないかと仮説を立てることができる。Nawata (2009)および縄田(2016)は、Rizzi (1997)以降の細分化された節の左方周辺部構造に基づいて、15世紀中頃に境に英語の節構造が(21a)から(21b)に変化したと論じている。

表5 先行詞付関係節の推移 (PPCME2, PPCME, PPCMBE)

| | M3 (1350-1420) | M4 (1420-1500) | E1 (1500-1569) | E2 (1570-1639) | E3 (1640-1720) | L1 (1700-1769) |
|----------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| that 関係節 | 87% | 74% | 54% | 27% | 26% | 15% |
| wh 関係節 | 12% | 23% | 43% | 66% | 60% | 71% |
| ゼロ関係節 | 0.3% | 3% | 3% | 6% | 14% | 14% |

(縄田 (2022: 306))

- (21) a. 古英語 – 後期中英語の節構造
 $[_{ForceP} Force [_{TopP} Top^h [_{FocP} Foc [_{TopP} Subj. Top^i_{\#} [_{FinP} Subj. Fin_{\pi} [_{TP} T_{\tau} [_{VP} v]]]]]]]]$
 b. 後期中英語 – 初期近代英語の節構造
 $[_{ForceP} Force [_{TopP} Top^h [_{FocP} Foc [_{TopP} Top^i [_{FinP} Subj. Fin_{\#,\pi} [_{TP} Subj. T_{\tau} [_{VP} v]]]]]]]]$
 (cf. Nawata (2009), 縄田 (2016))

Topⁱ, Fin, T に下付文字で添えられてた #, π, τ は、それぞれ数、人称、時制の動詞屈折素性を表している。動詞が複数形を示す一致形態素 -en を保持していた 15 世紀中頃までは、下位の話題範疇 Topⁱ が数の屈折素性を、定性範疇 Fin が人称の屈折素性をそれぞれ担っていた。しかし、動詞の複数形一致形態素が消失した 15 世紀中頃以降は数素性と人称素性がともに Fin によって担われるようになった。またそれにともない、英語の主語位置は (21a) に示した TopⁱP 指定部および FinP 指定部から、(21b) に示した FinP 指定部および TP 指定部へと下方推移した。この分析が正しければ、英語は古英語から 15 世紀中頃にかけては主語や話題要素がかならず CP 領域 (FinP よりも上位の範疇) を占めて談話上の解釈を受ける談話階層型言語であったが、15 世紀中頃以降に主語が TP 領域へと下方に推移することでその特性が失われ、主語卓越型の言語になったといえる。また (21b) では TopⁱP が網掛けになっているが、これは Topⁱ が数素性の宿主でなくなったのもなつてこの範疇自体が不活性となり、句構造から消失したことを示している。いわゆる V2 語順は TopⁱP 指定部に話題要素や主語が義務的に移動することで派生されていたため、(21a) から (21b) への構造変化にともなつて V2 語順も衰退した。

V2 語順の衰退とゼロ関係節の発達の同時性を捉えるために、縄田 (2022) は TopⁱP の機能が主節と関係節では異なる方法で変化したと述べている。具体的には、主節では (21b) のように TopⁱP が単に消失したのに対し、関係節では R(ative)-Top という範疇へと機能転化されたと論じている。図式的にまとめると下の図 3 のようになる。15 世紀中頃までの主節では、話題要素が TopⁱP 指定部として併合することで話題化文がつけられた。それに対して 15 世紀中頃以降のゼロ関係節では、先行詞となる名詞 N が R-Top に併合し、N の方が投射することで関係節を含む NP が形成される。

ゼロ関係節が that 関係節や wh 関係節よりも小さな構造をなしていることを示す証拠として、(22) の例を挙げることができる。that 関係節や wh 関係節と異なり、ゼロ関係節の内部では話題化が生じない。

図 3 Topⁱ の機能変化



- (22) a. This is the kind of car [that [for my son]_i I wouldn't even have considered buying _{t_i}].
 b. a man [whom [for his brutal insolence and cruelty]_i Robin had long hated _{t_i}]
 c. * This is the kind of car [[for my son]_i I wouldn't even have considered buying _{t_i}].
 (Bianchi (1999: 228))

TP 分析をとるにせよ TopP 分析をとるにせよ、ゼロ関係節の内部には話題要素の着地点となる場所がない。本稿で採用する TopP 分析のもとでは、関係節の先行詞となる名詞 N が関係節内部から移動して R-Top に併合するため、さらなる話題化が生じる余地がない。

以上をふまえて制限 wh 関係節とゼロ関係節の構造を示すと、それぞれ (23a, b) のようになる。

- (23) a. 制限 wh 関係節
-
- b. ゼロ関係節
-

両者の違いは関係節のサイズにあり、制限 wh 関係節は CP、ゼロ関係節は TopP となっている。ただしどちらの構造も (24) の集合併合 (Set-Merge) によって先行詞 N と関係節 CP/TopP を結合させている点に変わりはない。

- (24) Set-Merge
 Merge (α, β) → {α, β}

これは、制限 wh 関係節とゼロ関係節が埋め込み型非制限関係節のような付加構造ではなく、いわゆる補部構造をなしていることを示している。制限関係節が N の補部であるとする立場の分析としては Platzack (2000) や Cecchetto and Donati (2015) があり、本稿でもこの分析を採用したい。

6. 結語

以上、本稿では関係詞の機能に着目することで関係代名詞のDシステムからwhシステムへの移行について新たな仮説を提示するとともに、wh関係節の発達過程を近年の極小主義の枠組みで解釈し、マクロな視点から節構造の通時的変化の方向性を提示することを試みた。要点はつぎの2点にまとめられる。

(25) まとめ

- a. 英語のwh関係代名詞は、まず談話指示機能をもつ疑問詞whichが転用される形で発達し、その後who(m)へと拡大した。wh関係節は多重起源構文の一種である。
- b. 英語の関係節の一連の変化は、節のサイズが縮小しつつ被修飾要素に組み込まれていく過程として捉えることができる。

(25a)に関しては先行研究の自由関係節由来説を批判的に検討し、英語の先行詞付wh関係節は独立which節を主たる起源とし、自由関係節が変化の触媒となった多重起源構文であることを明らかにした。またDシステムからwhシステムへの移行の引き金となったのが指示詞の屈折の衰退ではなくその指示機能の低下であるとするので、sē/sēo/pætの衰退とwho(m)/whichの発達の間にかなりの時間差があったことや、whichがwho(m)よりも早く発達したことを説明した。

また(25b)に関しては、関連する関係節の範疇と構造構築操作を表6のようにまとめることができる。並列型非制限wh関係節から埋め込み型非制限wh関係節を経由して制限wh関係節へ、そして最終的にゼロ関係節へと発達するにつれて、節の範疇はSAPからCP、そしてTopPへと徐々にサイズが小さくなっている。また、構造を構築する操作は並列構造をつくるFORMSEQUENCEから付加構造をつくるPair-Merge、そして補部構造をつくるSet-Mergeへと変化している。これは、修飾要素である関係節が被修飾要素へと徐々に組み込まれる方向で変化していることを示している。

最後に、FORMSEQUENCEからPair-/Set-Mergeへという関係節の構造構築に関する通時的変化が進化レベルでの言語の変化と平行的であることを(26)に指摘して本稿を閉じたい。異なる時間スケールをもつ歴史的変化と言語進化でこのような共通性がみられるのは大変興味深い、その考察については今後の課題としたい。

(26) 言語変化と言語進化の平行性

- a. 併合操作が存在せず階層構造をもたなかった原型言語(protolanguage)には、語順に基づく線形文法しかなかったと推測される(Jackendoff and Wittenberg (2017), 藤田(2018))。
- b. 並列構造の非制限関係節から内心構造の制限関係節へという英語のwh関係節の発達は、言語の進化と平行的な過程をたどっている。

謝辞

本稿は言語変化・変異研究ユニット第9回ワークショップ(2022年9月18日;オンライン開催)および日本英語学会第40回大会シンポジウム「英語史における主語と節構造の統語変化」(2022年11月6日;オンライン開催)での発表原稿に修正を加えたものである。本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C):課題番号21K00584)および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」による成果の一部である。

注

1. 略語は以下のとおり。ACC=accusative, M=masculine, NOM=nominative, NUET=neuter, SG=singular.
2. 表中の時代区分は以下のとおり。M 1=1150-1250, M 2=1250-1350, M 3=1350-1420, M 4=1420-1500, E 1=1500-1569, E 2=1570-1639, E 3=1640-1720, L 1=1700-1769, L 2=1770-1839, L 3=1840-1914.
3. 検索式は(NP* iDoms CP-REL)AND(CP-REL Doms WNP*)AND(WNP* iDoms ! 0)および(NP* iDoms CP-REL)AND(CP-REL iDoms WNP*)AND(WNP* iDoms 0)である。各コーパスの総語数は以下のとおり。PPCME 2 (約120万語)、PPCEME (約170万語)、PPCMBE (約100万語)。PPCEMEに関しては、今回の調査ではPenn 1 デイレクトリ(約60万語)とPenn 2 デイレクトリ(約59万語)のみを検索対象として、他のコーパスとサイズをそろえた。調査対象となった先行詞付関係節の用例は、計35375例である。
4. 表4では制限用法と非制限用法の両方でwh関係詞の生起数が表2より多くなっているが、これは表4ではwhichに加えてwho(m)も調査の対象にしているためである。

表6 関係節の範疇と構造構築操作

| | 並列型 非制限 wh 関係節 | 埋め込み型 非制限 wh 関係節 | 制限 wh 関係節 | ゼロ関係節 |
|--------|-------------------|---------------------|-----------|-----------|
| 節の範疇 | SAP | SAP/CP | CP | TopP |
| 構造構築操作 | FORMSEQUENCE | Pair-Merge | Set-Merge | Set-Merge |

参考文献

- Allen, Cynthia L. (1980) *Topics in Diachronic English Syntax*, Garland, New York.
- 天野政千代 (1999) 『言語要素の認可—動詞・名詞句・副詞—』研究社, 東京.
- Bianchi, Valentina (1999) *Consequences of Antisymmetry: Headed Relative Clauses*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Cecchetto, Carlo and Caterina Donati (2015) *(Re)labeling*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) “Beyond Explanatory Adequacy,” *Structures and Beyond*, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford.
- Chomsky, Noam (2021) “Minimalism: Where Are We Now, and Where Can We Hope to Go,” 『言語研究』160, 1-41.
- Doherty, Cathal (2000) *Clauses Without “That”: The Case for Bare Sentential Complementation in English*, Garland, New York.
- Emonds, Joseph (1970) *Root and Structure-Preserving Transformations*, Doctoral dissertation, MIT.
- Emonds, Joseph (1979) “Appositive Relatives Have No Properties,” *Linguistic Inquiry* 10, 211-243.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 藤田耕司 (2018) 「統語演算システムの進化」『言語の獲得・進化・変化』, 遊佐典昭(編), 125-148, 開拓社, 東京.
- Fuß, Eric (2021) “Wh-Relatives in the History of German (And What Gender’s Got to Do with It),” *Journal of Historical Syntax* 5, 1-36.
- Gisborne, Nikolas and Robert Truswell (2017) “Where Do Relative Specifiers Come from?,” *Micro-Change and Macro-Change in Diachronic Syntax*, ed. by Éric Mathieu and Robert Truswell, 25-42, Oxford University Press, Oxford.
- Hayashi, Norimasa (2022) *Labels at the Interfaces: On the Notions and the Consequences of Merge and Contain*, Kyushu University Press, Fukuoka.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 井上永幸・赤野一郎(編) (2019) 『ウイズダム英和辞典』第4版, 三省堂, 東京.
- Jackendoff, Ray and Eva Witternberg (2017) “Linear Grammar as a Possible Stepping-Stone in the Evolution of Language,” *Psyconomic Bulletin & Review* 24, 219-224.
- Miyagawa, Shigeru (2022) *Syntax in the Treetops*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 中山仁 (2008) 「気になる語法—主節から独立した Which 節」 WISDOM in Depth #13 (<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/wisdom-in-depth13>).
- Nawata, Hiroyuki (2009) “Clausal Architecture and Inflectional Paradigm: The Case of V2 in the History of English,” *English Linguistics* 26, 247-283.
- 縄田裕幸 (2016) 「英語主語位置の通時的下方推移分析」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』, 小川芳樹・長野明子・菊地朗(編), 107-123, 開拓社, 東京.
- 縄田裕幸 (2022) 「縮みゆく関係節—英語接触節の出現に関する通時的考察」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3』小川芳樹・中山俊秀(編), 302-314, 開拓社, 東京.
- Platzack, Christer (2000) “A Complement-of-N⁰ Account of Restrictive and Non-Restrictive Relatives: The Case of Swedish,” *The Syntax of Relative Clauses*, ed. by Artemis Alexiadou, Paul Law, André Meinunger and Chris Wilder, 265-308, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Ross, John Robert (1970) “On Declarative Sentences,” *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 222-272, Ginn and Company, Waltham.
- Speas, Peggy and Carol L. Tenny (2003) “Configurational Properties of Point of View Roles,” *Asymmetry in Grammar, Vol. 1: Syntax and Semantics*, ed. by Anna Maria Di Sciullo, 315-344, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』開拓社, 東京.
- Van de Velde, Freek, Hendrik De Smet and Lobke Chesquière (2015) “On Multiple Source Constructions in Language Change,” *On Multiple Source Constructions in Language Change*, ed. by Hendrik De Smet, Lobke Chesquière and Freek Van de Velde, 1-17, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Woods, Rebecca L. (2016) *Investigating the Syntax of Speech Acts: Embedding Illocutionary Force*, Doctoral dissertation, University of York.

コーパス

- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani (2010) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Modern British English* (PPCMBE), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, 2nd ed. (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.